



水の文化
つなぐ

橋



- 松村 博 「土木技術者が読み解く橋の歴史の魅力」
- 中井 祐 「帝都復興における橋とデザインの思想」
- 五十畑弘 「ペDESTリアンデッキの登場と駅前空間の変化」
- 小林 厚 「モンゴルと日本をつないだ太陽橋」
- 片寄俊秀 「長崎・眼鏡橋復元の物語」
- 藤井 薫 「橋から省みる水都大阪の再生」
- 藤本英子 「橋上の賑わい空間復活の可能性」
- 斉藤 理 「川がない橋が秘めた東京の履歴」
- 島谷幸宏 「わたしの里川 — 川医者の里川診断」
- 古賀邦雄 「水の文化書誌 石橋・眼鏡橋のある風景」
- 坂本貴啓 「Go! Go! 109水系 神荒ぶ よみがえりの熊野川」

水の文化 June 2014 No. **47**

水の文化
2014
47



ミツカン水の文化センター

表紙上：日本三景の一つ、宮城県・松島。807年（大同2）坂上田村麻呂が毘沙門天を祀ったのが始まりといわれる小島には、橋桁の間が空いた透橋（すきばし）が架けられている。五大堂参詣にあたって、足元を見つめて気を引き締めるためという。

表紙下：江戸期以前に開削された人工水路が縦横に市内を巡る山梨県都留市。小さな橋に、人が集まる。

裏表紙上：視点を変えると、橋の姿もこんなに変わる。長崎のシンボル（中島川の石橋群）、眼鏡橋の下流側に架かる袋橋。かつて東岸には花柳界があり、光永寺住職の正木晴彦さんによると昭和40年代ごろまでは牡蠣船が係留されていたという。

裏表紙下1段目右：淀川に架かる、長さ790mのNTT十三（じゅうそう）専用橋。通信回線専用で、1984年（昭和59）に完成。

裏表紙下1段目左：埋め立てられた長柄運河（大阪市北区中津）に架けられた浜中津橋。何度も転用を重ね、鉄道橋としては日本最古。阪急中津駅前から国道176号線へ通じる側道の橋として、いまだ現役。

裏表紙下2段目右：国道176号線（十三筋）が十三大橋にかかる上り勾配の下は、道路がクロスしている。橋下空間を有効活用。

裏表紙下2段目左：十三大橋のたもとには東西南北を示す道標があり、足下には高麗橋の方向を指す浮き彫りが刻まれていた。

